巻頭言

外からの目　世界選手権の評価と提言

大久保　幸廣

愛知世界選手権を取材したスポーツマネージメント専門家がオリエンテーリングに対して提言する。

「オリエンテーリングはなぜマイナースポーツなのか」この問いに対して様々な答えが用意されているだろうが、世界選手権の視察調査から２つのことが考えられた。

普及の方向性の問題

一つは、普及の方向性の問題である。

1964 年に国民の健康・体力増強対策として導入されて以降、70 年代前半には、グループで歩いて行うオリエンテーリングは多くの愛好者を集める。そして現在でもポイントラリーなど学校、職場、地域で広く実施されている。誰もが気軽に参加できる体力づくりとして周知されてきたことは高く評価できる一方で、競技スポーツとしての普及を妨げる要因になってきたと逆説的に読み取ることが可能である。

しかしそれは、政治的な責任だけではなく、オリエンティア自身にもある。初心者にとって「森に入ることは怖い」「地図を読むのは難しい」ということは事実かもしれないが、だからといって「誰でもできる手軽な」オリエンテーリングへと無秩序に走り出すのはいかがなものだろうか。

例えば、いつでも誰でもを謳ったパーマネントコース。確かにパーマネントコースは安全かもしれないが、危ないから、難しいからといって取り上げてしまったものの中に、本来の楽しさが含まれてはいないだろうか。

またフラワーウォークにみられるような、クイズで楽しさを演出する手法もむしろオリエンテーリングの魅力を見失わせている。地図読みの難しさ、森に入る、自然に触れることこそが魅力であり継続的な楽しさに繋がるはずだ。

観るスポーツとしての仕掛け

二つ目は「みるスポーツ」としての仕掛けである。今大会でも、公平性という名のもとに、森の女王シモーネのパフォーマンスも隠され続けた。しかし、決して「競技特性だから仕方がない」とは思わない。

一度選手が会場を通過するリレーでのフォーマットは観客を大いに沸かせた。また私はメディアとして車でテレイン内を移動中、偶然ミドルレースで公道を横切るポイントに出くわしたが、選手が思い思いのルートを、しかも驚くような急斜面を猛スピードで駆け下りてくる光景は迫力があり、オリエンティアの凄さを垣間見ることができた。

現代のスポーツイベントではより多くの人に「みるスポーツ」としていかに意図的にその時空間を創造できるかが主催者に課せられた命題である[1]。観客のいない大スクリーン前は、それに失敗した顕著な例であろう。開会式も同様だ。閉ざされた空間、限られた時間という制限の中、工夫は見られたものの、関係者による関係者のための演出でしかなかったことは残念で他ならない。

愛知世界選手権は成功か？

短期的に見れば、今大会は確かに選手や役員からは賛辞を得たイベントとして評価されよう。しかし、それはあくまで大会関係者に対するマネジメントとしての評価に限定されるものである。

オリエンテーリングが持つ自然への配慮や挑戦などの競技特性、また愛・地球博とのパートナーシップ事業という有効資源を活かすことができず、中長期的な視点でのプロモーション戦略の失敗が指摘できる。

自然の叡智というコンセプトで、自然との共生を全面に押し出した万博は成功裏に幕を閉じた。一方世界選手権はどうだろう。万博の誘致において、また海外関係者をひきつける道具としての役割を果たしたのみである。万博は確かに誘致において、また海外関係者をひきつける道具としての役割を果たした。しかし、万博とオリエンテーリングの、一番の接点のはずであった「自然との共生」という視点からの十分な情報発信がなされただろうか。

また、ＪＯＡが掲げた競技普及のための日本選手の活躍も、結局のところ世間的にもメディア的にもインパクトを与えられなかった。さらには、大半においてなおざりにされた地域の実情が浮き彫りにされ、あくまで競技団体主導の大会関係者に向けて用意された大会に終止してしまっていたと結論づけられよう。

しかし、ＯＬは自然との共生、ユニバーサルスポーツとしてなど、未来へのキーワードとなる可能性を秘めたスポーツである。残されたのは、すばらしい地図という「モノ」だけではない。2005 年の 8 月、世界のつわもの達が聖地で競い合ったのである。この「コト」を生かすも殺すも今後の取組み次第であるのはいうまでもない。

オリエンテーリングの魅力

オリエンテーリングの魅力は何なのか、なぜオリエンテーリングにひかれたのかをもう一度問い直す姿勢こそがオリエンテーリング界に求められているのである。「オリエンテーリングの魅力は」という質問に「速くかつ慎重に方向を定めて走らなければならない、大きな挑戦である。」とシモーネは力強く答えた。

日本のオリエンテーリング界が、新たな未来に向かうためには、世界選手権を負の遺産にしないよう、速くかつ慎重に方向を定めて進む、大きな挑戦が必要なのだ。

1）参考文献（佐伯聰夫編「スポーツイベントの展開と地域社会形成」不昧堂出版，2000）

著者紹介：
筑波大学大学院（社会人）にて、スポーツマネージメントを専攻。外部者の目で、昨年の WOC を同僚２名とともに詳細に取材した結果を「スポーツイベント論実習」にて発表。

▲イベントは、いかに意図的・計画的に「みるスポーツ」としての時空間を創造できるかが問われる。